

アイリス・マードックとジャポニズム

井内 雄四郎

一般的に、イギリス人は日本について全く知らないか、全く無関心な人が多い。その中で、作品中の至る所で日本の文物が頻繁に登場するアイリス・マードックなどはきわめて例外的な存在といつてよい。そればかりではなく、彼女は1969年、77年、93年の三回も来日し、日本に対するその関心の深さは傑出している。私は1979年春から一年半、勤務先の大学の在外研究員としてロンドンに滞在したが、その際インタビューを行ったマーガレット・ドラブルも「私は日本のことは何も知らなくて」と明るく笑い、「でもマードックさんは随分日本に興味があるようね」と驚いていた。

実際マードックの作品は、第一作『網のなか』では浮世絵が、第二作『魅惑者から逃れて』では根付が登場し、第五作『切られた首』ではかつて日本で研究したことのあるユダヤ系女性人類学者が登場し、主人公のワイン商の面前で突如日本刀を抜き放ち、空中に投げ上げたナプキンを真っ二つに切ってみせたあと、日本人の刀に対する信仰について講義してみせる。第十四作『偶然の男』の外交官は仏教に心酔し、京都の寺に住みたいと願ひ、第十七作『言葉の子』のポップ歌手や第十九作『海よ、海』の主人公は禅に深い関心を寄せ続ける…。

いってみれば日本の文化や事物に対するこれらの関心は、そう深いものではなく、表面的なジャポニズムの域を出ないかもしれないが、中世日本の宮廷を背景に政治と愛の主題が目まぐるしく交錯する戯曲『三本の矢』（この題名も明らかに毛利元就の有名な故事を踏まえたものだろう）や第十八番目の長編『ヘンリーとケイトー』（1976）に登場するオスカー・ワイルドばりの老詩人が恋愛を機にたまたま知った俳句の魅力に突如目覚め、多くのハイクを作り続けるという設定などは、決して単なるジャポニズムとしては片づけら

れない知的な重みと関心を感じさせる。

私がドラブルと会見した同年の6月24日（火）午後（現地時間）、ロンドンのスローン・スクエアのパブでマードックと会見したのも、マードックと日本文化の接点や関心をくわしく、正確に知るためだった。当日は小雨の降る肌寒い陽気だったが、少しおくれて店内に入ってきた白いレインコート姿のマードックは、挨拶もそこそこに、自分と禅や俳句について一気に、よどみなく語りはじめた。

それによると、彼女がはじめて文化にふれたのはオックスフォードの学生時代アサー・ウェイリー訳『源氏物語』に接してその美しさと精妙な心理描写に深く感動したのが最初であり、やはり同じ頃鈴木大拙の禅に関する著作にふれ、禅による自己解脱に強い興味を抱いたと語った。また俳句の存在に目をひられたのは、在日イギリス人 R.H. ブライス教授の俳句に関する著作によってであると述べた。

ブライスには全四巻の『俳句』（1949-52）と全二巻の『俳句史』（1963-64）の二つがあるが、インタビュー後手紙で問い合わせたところ、予想通り前者であることが確認できた。両作とも俳句は五七五の音節と季語を含む日本の短い無韻詩で、直接的かつ単純さを特色とすると説明しているが、両書の最大の相違は『俳句』が全四巻というスペースの大きさも手伝って、俳句と和歌、連歌、禅、漢詩などとの関連をおびただしい例を挙げ、緻密に論じていることだろう。

とりわけ第一巻『東洋文化』（1949）で注目されるのは、ほぼ全巻を通して俳句と禅の本質的なつながりを熱っぽく力説し、例えば「俳句は禅の一形式」であり、芭蕉は禅の精神を体現した世界的な詩人だと評価しているのが注目に値する。ちなみに1960年代アメリカのビート派詩人の間でたかまった俳句や禅に対する熱狂的なまでの共感

やはりブライスの著作を通じてであることを考えると、マードックのこの答えはすこぶる理解できるものだった。

予定の一時間はもう少し過ぎている。私が礼を述べて立ち上がろうとすると、突然マードックはあなたは俳句をつくりますかと訊ねてきた。私が少し照れながら、イギリスに来て作った俳句のうち、「イギリスはクイーンに犬に薔薇の国」「秋深

し山なき国に慣れずをり」「酩酊の午後に傾く紅葉山」の三句の英訳を差し出すと、彼女はじっと見つめたあと、やがて「イギリスは…」の句は面白い、イギリスは本当にクイーンと犬と薔薇のくにですねえと声を挙げて笑い、ハンドバッグにその紙片をしまった。この会見は私のイギリス滞在中俳句が取り持った最も昂揚した楽しい時間だったと思わずにはいられない。